

俳句

北川 栄子

藤田 治夫 選

吉永 幸司

特選 重機去り桜一樹の屋敷あと

古沢町 戸成 晴美

(評) 昔ながらの由緒ある豪邸跡であろうか。今、空き家が増え、各地で壊されているが、残念で淋しい想いがしてならない。この句は、屋敷全てを更地にしないで、せめてもの想い出に、「桜一樹」を残したのであろう。代々続いてきた由緒ある歴史の流れを、しみじみと感じさせる佳句である。(治夫)

入選 航跡を長く伸ばせばせり春の湖

西今町 秋口 大門

(評) 美しく青を称える湖に、白く長く曳く航跡が、春らしくのんびりとした様子を醸し出している。凪ぎ渡る静かな琵琶湖に、湖の女神も微笑みを浮かべているようだ。(栄子)

入選 高々と春風蹴ってサッカー部

西今町 前田 弘子

(評) 早春の晴れ渡る大空へ、中学生が、思い切り蹴り上げるボール。いよいよスポーツシーズン開幕。「春風蹴って」の言葉に魅力。「高々」の言葉が生きている。元氣瀟刺の若者の姿。(治夫)

特選 風薫る窓全開の参観日

松原町 中島 房女

(評) 子ども親も、もしかすると先生も緊張する学習参観日。その緊張をほぐすかのように、窓が開け放たれていたのだ。樹々を渡り来る心地好い風に、澆刺とした子供達の受け答えが聞こえて来るようだ。(栄子)

入選 歩き初む幼なの一步春を呼ぶ

後三条町 北村 しげ子

(評) 幼児が歩くという動作をするのは待ち遠しいものです。ヨチヨチ歩きとひと言です。が、それまでの長さ、待つ気持ち、不安などが一気に大きな喜びに変わります。「春を呼ぶ」がすべてを表しています。(幸司)

特選 もう秘密などなき夫婦日向ぼこ

米原市 日比 陽子

(評) 縁があって二人が知り合い夫婦となった長い年月。振り返ってみるといろいろな歴史を刻み込んできました。「秘密などない」といながら「支え合ってきた感謝の気持ち」が「日向ぼこ」に滲んでいます。(幸司)

入選 紫紺なる車夫の脚絆や花の路

東沼波町 石井 浪栄

(評) 京都の嵯峨野の辺りの風情が感じられる。百花繚乱の季節。新しい紫紺の脚絆の車夫の人力車。作者の目のつけどころが素晴らしい。色彩も環境に調和している。(治夫)

入選 銀座街今も小暗き種物屋

高宮町 細田 惠貢子

(評) 仄暗いと言うイメージを持つ種物屋だが、それが却って落ち着くから不思議である。銀座の今昔にかかわらず、種や苗には、これから育つと言う未来の明るさがある。(栄子)

入選 三畳を我城として夫の春

東近江市 松本 ちずる

(評) 仕事を中心にして外で生活することが多かった時代を経て定年。家庭で暮らすことが多くなりました。家庭における居場所。それを城と見立て、広さを三畳と限定したことが印象に残りました。(幸司)

入選 吾が住むは人の星なり水守る

東近江市 河崎 章

(評) 日照りが続く田の水を引き入れようとする水盗みがあり、その諍いを防ごうための水番を行うということがありました。長い農業のあれこれの歴史をつなぎ「人の星」と言い切っていることが奥深い作品です。(幸司)

入選 鶯の一声を待つ屋形舟

大藪町 吉田 和治

(評) 「鶯」は「春吉鳥」とも言われる。早春の水郷めぐりのシーン到来を待つ屋形船であろうか。もしくは、鶯の名所で、船を止め、鶯の声を、今か今かと待っているのだろうか。この句からは、色々な場面や情景が想像でき、楽しい。「鶯の一声」が効いている。(治夫)

入選 首振ってクレーン残暑をかき回す

大藪町 是沢 卓

(評) 立秋を過ぎても、なお三十度を越える真夏日。暑さに耐えながらのクレーン作業。この暑さを何とか和らげたいという思いからか、「残暑をかき回す」ように見えたのだろう。スケールの大きい巧みな表現である。(治夫)

入選 水温む湖に神秘の島一つ

地蔵町 佐古 徳子

(評) 春三月、季節も整いつつある湖に浮かぶ島。西国三十三所の第三十番札所でもあり、観音を、弁才天を、龍神を祀る竹生島こそ、神秘なる島であろうと思いたい。(栄子)

入選 一徹を肩に八十路や亀の鳴く

下西川町 古川 たけ

(評) 一徹イコール頑固者と思ってしまうが、矍鑠として生きて来られたのであろう。俳人は鳴かぬ亀を鳴かせるが、それもまたロマンである。一徹と亀の鳴くロマンの取り合せがよい。(栄子)

入選 強東風や船板塀を掃いて行く

下稲葉町 上田 タツ子

(評) 東風は、春によく吹く東からの風。強東風はその激しい様子です。船板塀は水上交通で活躍した和船に使っていた古板で作った塀。船の古材が形を変えて家々を風雨から守る町の風景を巧みに表現された作品です。(幸司)

佳作 川筋を音符のように螢舞い

長浜市野口成人

佳作 氣持良く葉ボタン並ぶ地蔵尊

鳥居本町北川夏子

佳作 古代文字なぞる石碑や五月闇

本庄町田口洋子

佳作 大花火空も琵琶湖も使いきり

稲枝町谷口清香

佳作 桜咲きなほ進む勉学の道

外町知田照子

佳作 天守まで球音響く青嵐

清崎町村田惇一

佳作 よきことの舞ひこむ予感梅ひらく

古沢町大橋しず

佳作 片手鍋牛乳あたたため春を待つ

日夏町圓敬子

佳作 鳥帰る知りつくしたる大空へ

京町二丁目堀井叔子

佳作 啓蟄の日ざしに土の膨みて

米原市田辺仁美

佳作 大雪晴孤高の城の輝けり

馬場一丁目西村節子

佳作 風雪の窓を圧する日本海

米原市畑中公雄

佳作 手を打って春の罨を誘いだす

正法寺町高井豊

佳作 天空に浮かぶ白亜の花の城

長浜市近藤甚一郎

佳作 一鋤に日の香土の香耕せり

日夏町寺村房子

佳作 一族の真ん中に居て初写真

米原市西村てる子

佳作 花を見る遠景も佳し樹下も良し

小泉町 北村 邦彦

佳作 雪搔きを終えて五勺の酒旨し

米原市 西尾 辰之

佳作 時雨来て湖の碧さをかき乱す

甘呂町 日和田 喜美子

佳作 親鸞像雪解しづくが笠をたる

稲里町 田辺 好子

佳作 華やぎを大地に広げ枝垂れ梅

城町二丁目 福原 芳江

佳作 舟底をゆつくりたたたく春の水

稲里町 勝見 政恵

佳作 大老の好みし柳風に揺れ

幸町 北澤 美佐子

佳作 風鈴に南部訛のあるごとく

中藪町 山川 美江

佳作 万緑のふところ深くありし歌碑

地蔵町 馬場 美也子

佳作 手のひらにつつむ湯呑や今朝の冬

東近江市 福澤 啓一

佳作 湖風にハミング乗せて花の城

長浜市 勝木 岩松

佳作 探梅の喜びに靴弾みゆく

芹橋一丁目 秋山 栄子

佳作 共に老い持ちつ持たれつ古茶新茶

本町二丁目 中島 暉枝

佳作 野仏に光集めて落椿

芹橋二丁目 大野 ゆう子

佳作 落のとう畑一面花ざかり

正法寺町 渡辺 英代

佳作 北風や整地となりし我が職場

鳥居本町 寺村 美恵

佳作 足裏に息吹き幽かれ青き踏む

稲里町野瀬善一

佳作 山門を抜け行く風に春匂ふ

外町筑田豊子

佳作 山の風小さく集め芝桜

佐和町大久保豊子

佳作 ゆっくりと晴れし湖行く雪見船

中央町辻 榮津子

佳作 少年に違う顔あり春祭

東近江市坂口靖子

佳作 山峡に媪一人の土雛

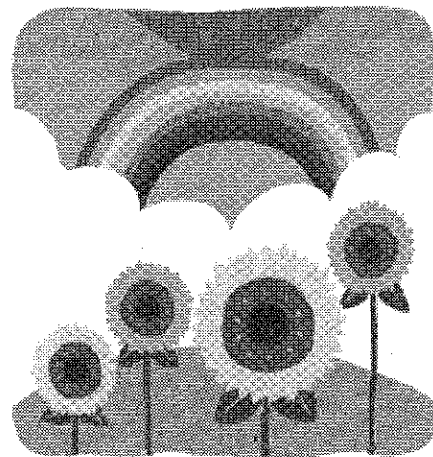
松原一丁目 金澤湖香

佳作 万緑や駆け出す吾子に追いつけず

長浜市樋口満智子

佳作 夕映えの縹雲刺す飛行雲

平田町樋水カツ子



《総評》

生活の中から生まれた句もあり、共感を覚えながら拝見しました。無季の句が出てきた時は残念に思いましたが、どの句も旨く詠まれています。次に心に留めている事を少し。客観写生は大切なことですが、ただ見たままを句に詠むと、それは写真になつてしまします。自分の目で見て感じた事を足して一句にする事が重要です。どこかで見えた句ではなく、自分だけの句を目指して下さい。

北川 栄子

味わい深い句がたくさんあり、選ぶのに苦労しました。今回は、新しい視点、観点から詠まれた新鮮さのある句を重点に選びました。俳句を続けていると、いつの間にか、マンネリ化したり、スランブに陥ることが出てきます。俳句を作ることが苦痛にもなります。これを克服し、楽しむには、よい句を作ろうと、意識過剰にならず、肩の力を抜いて、気楽に楽しみながら句を作ったり、今までの観点を変え、新しい視点からの句作りに挑戦してみてください。詠もうとする対象を、じっくりと、色々の角度から見つめ直すと、新しい発見や感動が生まれてくると思います。これをだいにじに句づくりをしてください。

来年も期待しています。奮つての応募を待つています。

藤田 治夫

応募された作品には、それぞれの方の生活や人生の履歴が背景にそれを、作品にするために丁寧に言葉を紡いでおられる姿を思い浮かべながら読みました。

作品全体からは、無理をしないで素直な言葉と季語が生き、まと

まりがある作品が多いという印象でした。これは、日頃から俳句に親しんでおられるだろうと思える作品の質の深さから地域の文化活動の高さが伝わってきました。

特選・入選・佳作というように選びましたが、その違いはほとんどありません。違いがあるとすれば、分かりやすさや想像ができるかどうかでしょう。一七文字という限られた中で形、句い、あるいは季節感が作品から伝わってくると心が動きます。季語が生き、季節感が伝わってくるといいことです。

繰り返し読み、作品と出会って豊かな気持ちになる時間が好きです。

吉永 幸司

選者吟

山城は質素堅牢百千鳥

北川 栄子

生きがいや畑に鋤き込む春の風

藤田 治夫

鳥好きの少年囁り聞き分ける

吉永 幸司